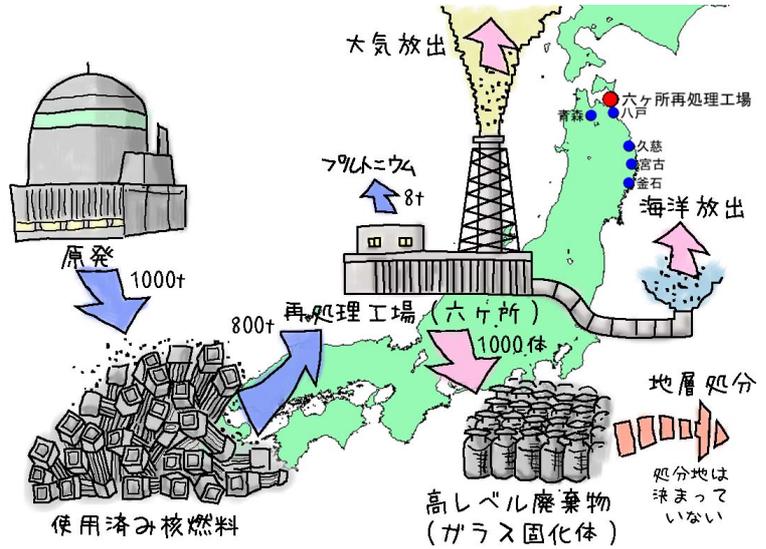
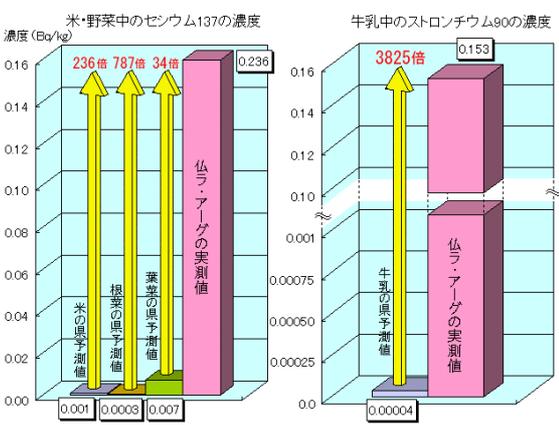


再処理工場とは？ 核燃料を燃やして発電する原発は、使用済み核燃料と呼ばれる核のゴミを生み出します。この使用済み核燃料からプルトニウムを取り出す工場が再処理工場です。青森県六ヶ所村にある再処理工場では、2年前から実際の使用済み核燃料を使った試験運転を始めました。2008年6月以降に本格運転に入る予定です。



空と海へ大量の放射能を放出 再処理工場は、プルトニウムを取り出すため、密封された使用済み核燃料をバラバラに切り刻み、閉じこめられていた膨大な量の放射能を開放します。そのため、原発とは比べものにならないほど大量の放射能が工場の外へ日常的に放出されることとなります。原発が1年で出す量の放射能を、再処理工場はたった1日で環境中に放出します。さらに恐ろしいのは、プルトニウムなど、重大事故でない限り原発から漏れ出さないような種類の危険な放射能が環境中へと出てくることです。気体状の放射能は、高さ150mの排気筒から大気へと放出され、液体状の放射能は沖合3kmにある放出口から海洋に流されます。



深刻な農作物の放射能汚染 青森県は、再処理工場が本格運転に入っても、農作物や畜産物に蓄積する放射能は、検出できないくらいごく微量なものだと予測しています。しかし、フランスにあるラ・アーク再処理工場の周辺では、野菜や牛乳からセシウムやストロンチウム、プルトニウムなどの放射能が検出されています。フランスで測定された放射能濃度は、青森県の予測値の数百倍～数千倍です。青森県の予測は、現実とまったくかけはなれた大幅な過小評価となっていることは明らかです。再処理工場が運転を始めれば、青森の農作物は深刻な放射能汚染をこうむることになるでしょう。

八戸、三陸に押し寄せる海の放射能汚染

海に流された放射能は津軽暖流に乗って流れますが、親潮前線にはばまれ、三陸沿岸にへばりつくように流れていきます。放射能放出口付近から約1万枚のハガキを海に流した海流調査では、岩手県の定置網にもハガキが漂着し、東京湾の入り口にも到達しています。再処理工場を運転している日本原燃や国は、放射能は拡散され薄まるので問題ないとしています。しかしハガキ調査の結果は、放射能が海岸に沿って流れ、湾に入り込んで蓄積する危険性があることを示しています。

